

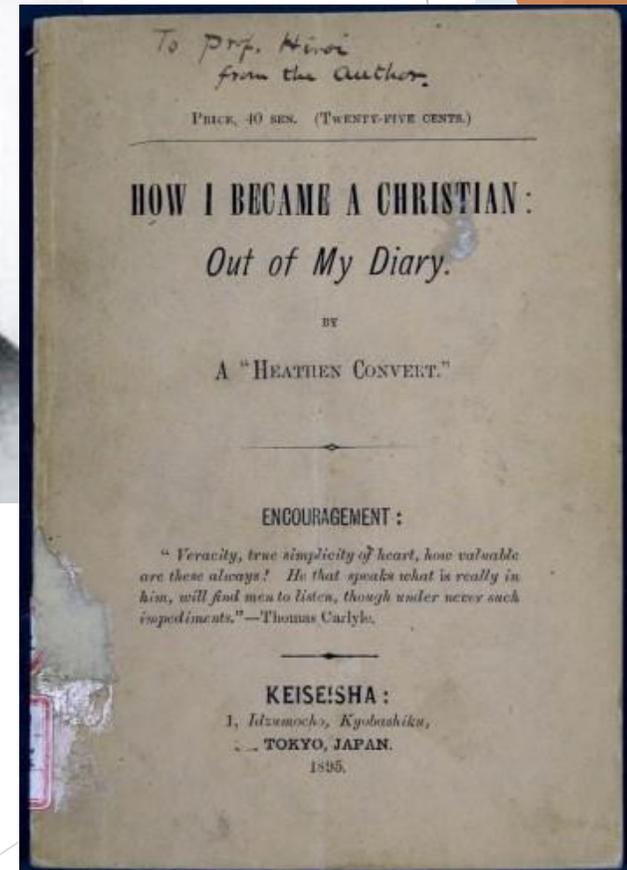
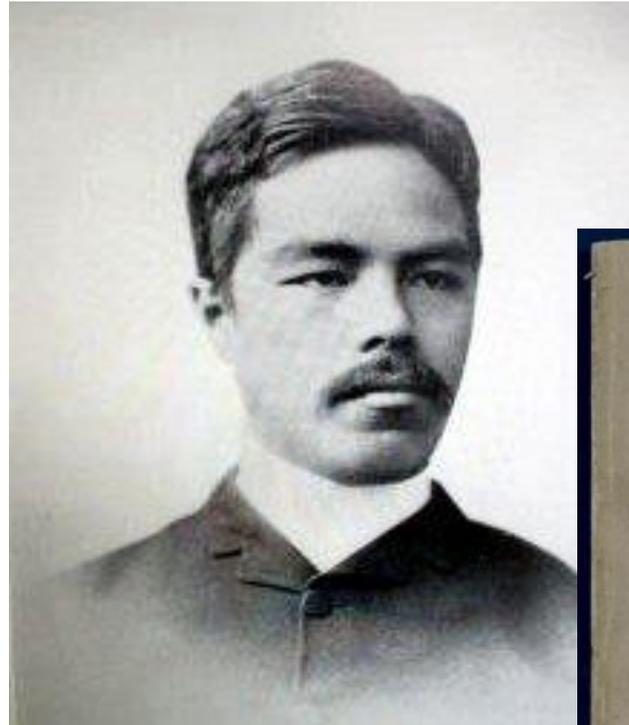
キリスト教「受容」のかたち1: 内村鑑三 (1861-1930) と近代日本におけるキリスト教



ゾンターク・ミラ
立教大学

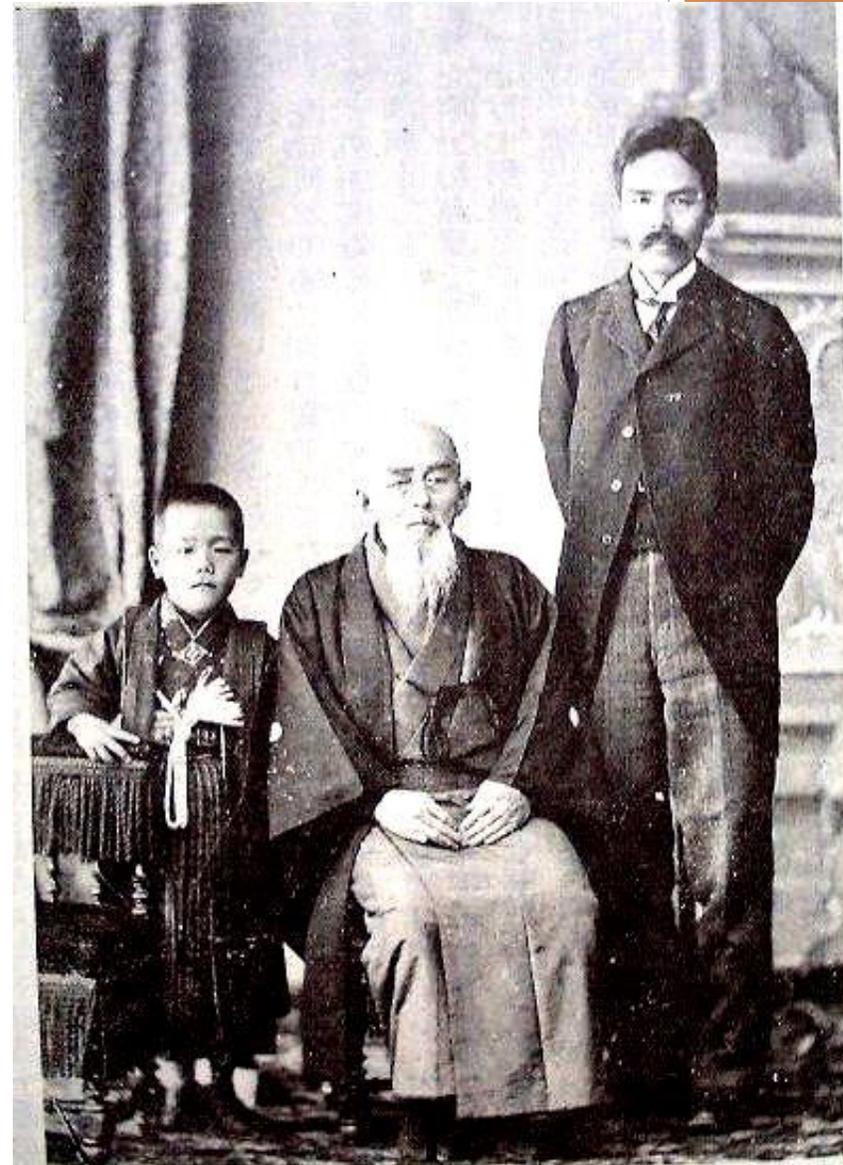
はじめに——内村鑑三と宗教改革

- ▶ 宗教改革 ⇒ 世界宣教
⇒ 帝国主義的拡張運動
⇒ 西洋諸国の「優性」
- ▶ “Jonathan X”, *How I Became a Christian*
⇒ 西洋・キリスト教
「文明」の批判



内村鑑三の背景 (1)

- ▶ 「武士」の子 ⇒ “born to fight from the cradle”
⇒ 近代日本の諸変化を反映する生涯
- ▶ ニューイングランド式の教育 ⇒ 「日本の天職」を
探求 ⇒ 「非戦論」の受入



鑑三の父と子

右から鑑三45歳・宜之74歳・祐之9歳 明治38(1905)年

内村鑑三の背景（2）

- ▶ 才能ある教師、時代の主な社会問題と対決しようとする活発な著者
- ▶ 「近代」が提起する中心的な課題：
 - 国家の独立、国民国家の形成、自国に対する誇り
 - 個人、宗教、そして宗教組織の役割
 - 「普遍的真理」の可能性

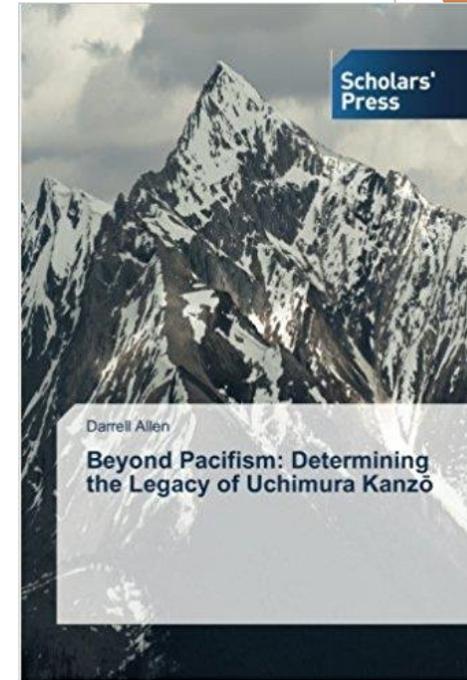
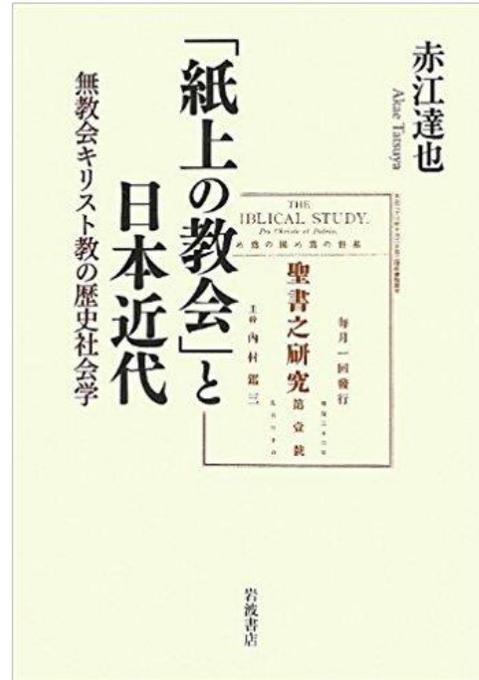
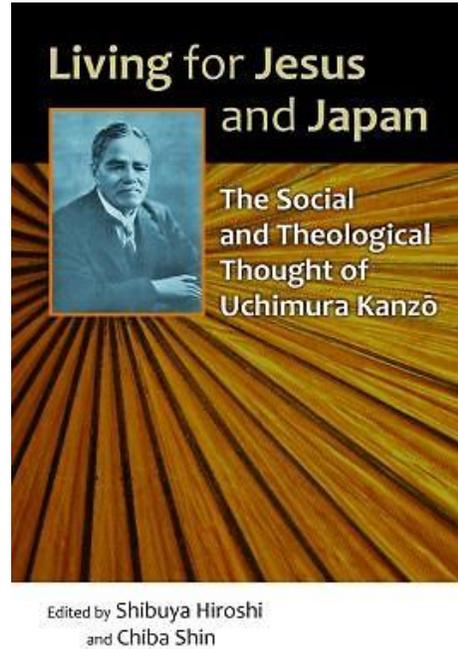
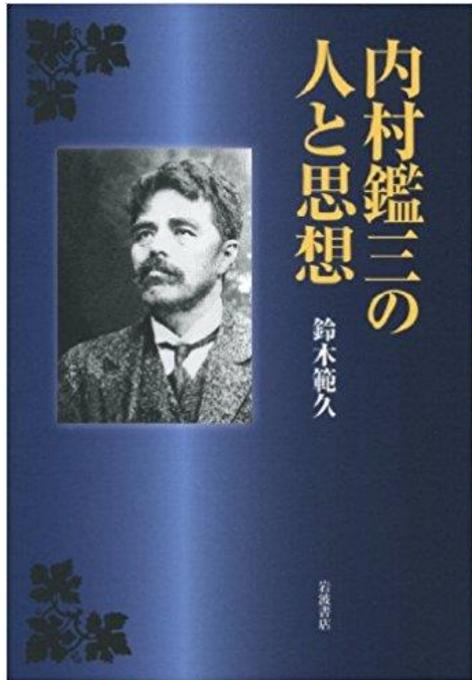


内村鑑三の遺産とは何か

- ▶ 無教会 ⇒ 「第二の宗教改革」
- ▶ 矢内原忠雄（1893-1961）や南原繁（1889-1974）など影響力ある継承者
- ▶ 内村に対する様々な評価：
 - 「影響がなかった人物」
 - 「近代日本の預言者」
 - キリスト教国家主義者



内村鑑三とその遺産に関する近年の研究



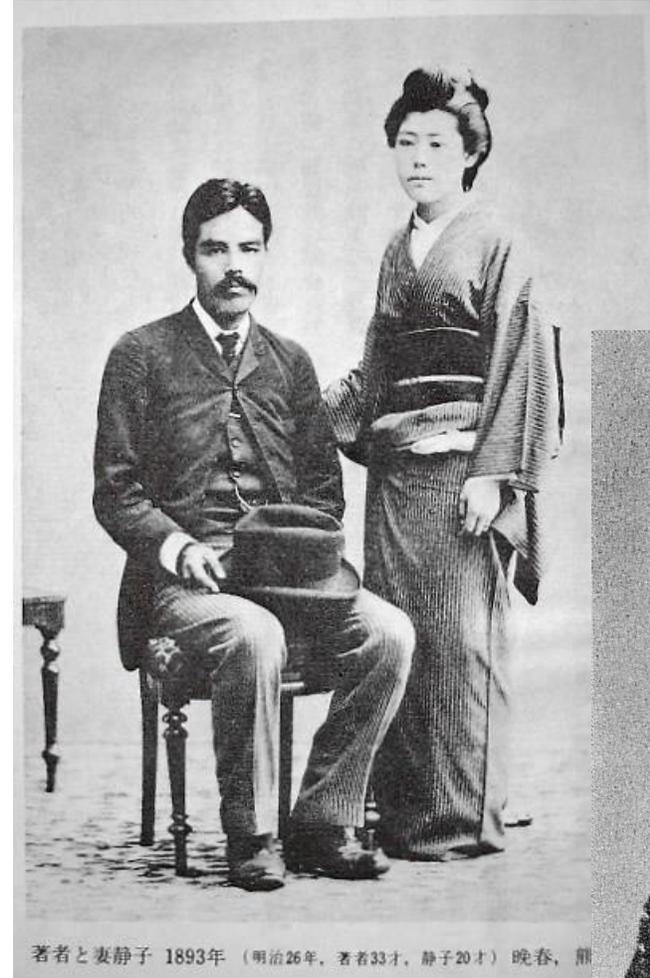
主な主張: *二元論の克服 *預言者的主体性
*愛国主義/国家主義 *非戦論 *無教会という社会
形態 *西洋からの独立

内村の精神史（鈴木典久、2012年）

- ▶ 人間と精神形成に作用した四つの特性（viii）：
 - 1) 生得的と思われる人一倍の几帳面さ、ある意味での偏執的志向
 - 2) 自然科学者として習得した「実験」的生き方
 - 3) 自然（天然）志向
 - 4) 素朴なものから日本の「天職」を基盤とするものへと発達したナショナリズム
- ▶ 移り変わる主眼： 現世 ⇒ 後世 ⇒ 永世

内村の精神史における「ゼロポイント」

- ▶ 不敬事件（1891年）の後に亡くなる妻加寿子（二人目の結婚相手）
- ▶ 娘ルツの死（1912年）
- ▶ 死の体験がもたらす危機を新しい視点を取り入れることで克服していく
 - ⇒ 信仰・世界観を修正
 - ⇒ 「真理は二個の中心を持つ楕円形である」



「心理の楕円形」 (1)

「内村自身の人生における重畳的実験を振り返るなら、カミと神々、キリスト教的愛の共同体と血縁・地縁的共同体、義と罪、無教会と教会という二元的対立に面して、その対立を深めるようにはたらいしたが、最終的には前者が後者を一方的に排斥するといった一元論に終わってはいない。そうかといって、安易な多元論をとっているのでもない。愛の共同体と血縁・地縁的共同体とでは「二つのJ」、義と罪とでは今

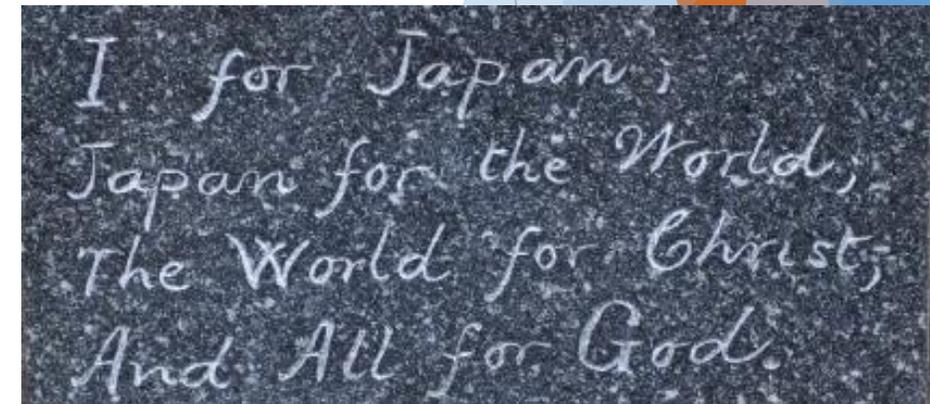
「心理の楕円形」 (2)

確認したように罪を罰する義と罪を許す愛、無教会と教会とでは「無教会は進んで有教会となるべきである」（「無教会主義の前進」全一四）との言葉からうかがえるように、無教会と有教会との別を超えている。前者が後者を取り込むことによる一種の調和が見出されるが、それはまだ安定した調和ではない。安定した究極的な調和は、万物復興の時に期すほかはないとされ、あるのはその時への希望であった。」

（鈴木、2012年、219/20頁）

内村のナショナリズムの発展

- ▶ 「二つのJ」 (Jesus/Japan)
⇒ 「二つのC」 (Christ/Corea/China)
- ▶ 改宗以前の宗教実践：
近代以前の「倫理性のない多神教」でも「呪術的心性」でもなく、むしろ精神化されたナショナリズム
- ▶ 北海道の鎮守神が祭られている神社を参拝 ⇒ 改宗 = 「祖国の背教」
- ▶ ナショナリズムという「祖国の神々」の一部を継承して改宗する



内村の自己主張における「三つのP」

新帝国主義の「三つのC」に対する応答：

- 預言 (prophecy) ⇔ 文明開化 (civilization)
- 愛国主義 (patriotism) ⇔ (西洋的) キリスト教 (Christianity)
- 非戦論 (pacifism) ⇔ 貿易による平和 (commerce)

「多極的ナショナリズム」 (Anthony D. Smith) の可能性

- 「同じ舞台における主人公たちの対話」としての国家主義
- 「内村の神学思想は公共への献身 (隣人、社会、国、地域、世界) と不可分」 (Shibuya 2013, xi)

預言 (prophesy)

- ▶ Shibuya: 『万朝報』 評論家としての活動(1898-1903) ⇒ アモス 5:24 「公義を水のように、正義をいつも水の流れる川のように、流れさせよ」
- ▶ Allen, Shogimen: 「裏切られた者の激怒」 (“fury/ wrath of the betrayed” / “paroxysms of fury”)
- ▶ Barshay: 日本の「預言者」 (本居宣長、平田篤胤) が「万国指導の原則を提示したとする内村
- ▶ 鈴木: 「天の声」 = 「静かなる細かい声」を聴く能力 ⇒ “charisma”



「愛国主義的預言者」としての内村

- ▶ 内村: 預言者 = 国民から孤立して、迫害される愛国者
- ▶ Shogimen: 1924年から内村の愛国主義はイザヤとエレミヤに影響された ⇒ 内村は自分の孤立を預言者に見出し、預言者、そして終にイエスをも愛国者としていくようになる
- ▶ 矢内原:
 - 内村 = 「国家の理想に忠実で長期的政策を導く」愛国主義的預言者
 - 預言書を愛国主義を養う上に不可欠とし、信仰の「個人化」の予防とする
 - 預言者の精神と愛国主義を基盤とする無教会

愛国主義 (patriotism)

- ▶ Yagyū: 内村の「預言者的国家主義」が非戦論と再臨信仰の受入に受ける影響 ⇒ 恵まれた日本を祝福する「祭司」から、確信・信念のゆえ祖国に抵抗する「預言者」へ
- ▶ Shogimen: 愛国主義の理論を提示しなかった
 - ▶ 井上鉄次郎の愛国主義論「独占」への反発のみであった（特に『勅語衍義』における「共同愛国」と「国家の為に死する」理念）
 - ▶ 「非戦論」者になった内村は「いわゆる愛国心」を批判し、「剣」に代わる「愛」を強調する

内村の愛国主義に対する批判

- ▶ 矢内原が反応した批判：「過度に国家主義的」
- ▶ Shibuya: 「世界を使用しようとする欲望に類似する側面がある」
- ▶ Barshay: 内村にとって国民性（nationality）は「人類の歴史と希望における普遍構造」であった ⇒ 「内村の思想の限界（uncrossable horizon）であった

非戦論 (pacifism)

- ▶ 日清戦争を義戦とする立場から1903年頃に非戦論者の立場に変わる
- ▶ Ohyama: アメリカに受けた教育の結果であり、「進歩する歴史」観における変更を伴う ⇒ 『万朝報』を退社
- ▶ Yagyu: 「先鋭的な宗教共同体をめざす現世否定」⇒ 内村の膨張論が経済的な「国内膨張」を強調し始める

新帝国主義の「三つのC」に応答する「三つのP」

- ▶ **文明開化 ⇒ 預言:**
 - ▶ 物質的文明に対する「預言者」的批判
 - ▶ 現地人の主体性を主張・要求
- ▶ **西洋的キリスト教 ⇒ 愛国主義:**
 - ▶ 日本の思想伝統の再確認
 - ▶ 「第二の宗教改革」を経て形成される「日本的キリスト教」の肯定
- ▶ **国際貿易による平和 ⇒ 非戦論:**
 - ▶ 貿易による平和を嘘として拒否し、平和の約束の先鋭化

「預言者」の創出（1）

- ▶ 「預言者」の概念が近代化過程において「伝統」として「創出」された
- ▶ 内村は、批判が望ましくない文脈において批判を正当化し、維持するために「預言者」の自己主張をする
- ▶ 「預言者」としての自己主張は内村以外の場合もよく見られる
- ▶ 内村とその継承者および研究者の「預言者」論を歴史的な文脈において分析することが必要

「預言者」の創出 (2)

- ▶ 「普遍的真理を直観的に把握し」、「歴史の発展に刺激を与えた」「カリスマ的個人」としての預言者:
 - Heinrich Ewald, Julius Wellhausen, Bernhard Duhm
 - 「預言者」に焦点を当てるシオニズム運動による「ユダヤ人」の創出
 - Hermann Cohen: 「近代文化の最も重要な源泉」であるプラトンと預言者たち
⇒ 預言者は歴史的発展による正義の実現を出張した

内村の遺産とは（1）

▶ Allen: 内村の遺産についての評価:

- ▶ 「日本の発展に積極的影響を与えることができなかった」
「国内および国際政治の本質をつかめなかった」
- ▶ 葛藤においてキリスト教信者として確信的な立場を取れたが、それで周辺の人々に謎の存在となった
- ▶ 独立心を体現したヒーロー
⇒ 「非戦主義」を内村の遺産の中核とする継承者および戦後の研究者
⇒ 戦前内村の葛藤をもたらした独立心が戦後の立場からその最大の徳目とされる

内村の遺産とは（2）

内村の非戦主義に対する批判:

- ▶ 思想的に制限され、「よく開発された哲学的基盤を欠けている」⇒「日本への忠実の一側面に過ぎない
- ▶ 祖国に忠実であるゆえ、良心的兵役拒否を否定した
- ▶ 遺産のその他の中核（core legacies）：
 - 無教会主義：『聖書之研究』と聖書研究会が温床であった

内村の遺産とは (3)

- ▶ 無教会を遺産と中核と捉えることができるのか:
 - この「紙上の教会」は、死去直前に内村自身によって取り消される
 - 内村は無教会を「真の教会」としなかった
 - 再臨運動を背景に形成される ⇒ 再臨信仰は「教会の統一」の複雑な課題を綺麗に解決してくれる ⇒ 西洋文明への審判、第二の宗教改革の必要性
 - 再臨運動は「三つのP」の交差点から出発する
 - 1924年以降内村は、西洋的キリスト教と日本の教会に対する批判を強めて「形のないキリスト教」(formless Christianity)を要求する

「形のない教会」としての無教会

- ▶ “Christianity of the no-church principle”:
 - “90 percent of spirit and [only] 10 percent of flesh”
 - “Protestantism carried to its logical consequences”
 - “a reflection of heavenly existence”
- ▶ 無教会の解釈をめぐる継承者（塚本虎二、1885–1973）との対立と別れ
- ▶ 内村自身が無教会を脱会したにも関わらず、無教会は内村の遺産とされる
- ▶ 「形のないキリスト教」は継承者および研究者が主張するほどオリジナルで日本的な発想ではない

“Patriotism” vs. “Nationalism”

- ▶ 内村はアングロサクソンの「部族的キリスト教」 (Andrew Walls) に学んでいた:
 - 「国民国家」の限界を超越できなかった
- ▶ 赤江達也の新著がもたらした議論:
 - 人道主義的教育を受け、自己完成を目指すインテリによって形成された「紙上の教会」
 - 「キリスト教国家主義」の批判
 - 無教会第2世代における「真の全体主義」や「民族共同体」の概念が「ファシズムに近い」とされる

おわりに

- ▶ 赤江の新著は日本人キリスト教徒による帝国イデオロギーの受入に関する近年の研究を発展させる
- ▶ 内村とその継承者が抵抗者として賛美されてきたが、その愛国主義/国家主義の批評が必要
- ▶ それはキリスト教徒が非キリスト教の国民国家に所属することに対する近代的解釈を把握するために必要である

参考文献：

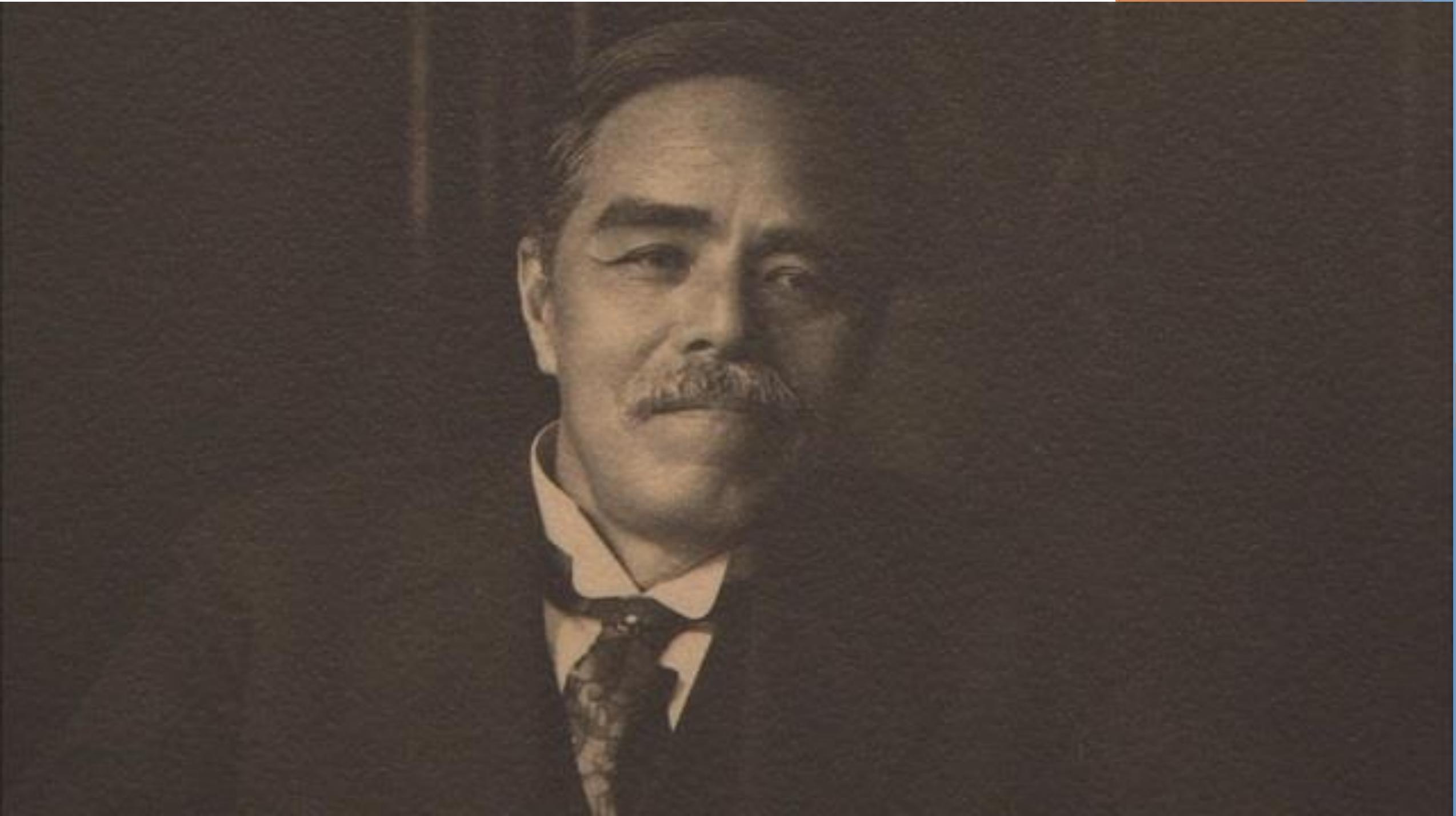
鈴木典久『内村鑑三の人と思想』岩波書店、2012年

Shibuya Hiroshi and Chiba Shin, *Living for Jesus and Japan: The social and theological thought of Uchimura Kanzô* (Grand Rapids, Michigan / Cambridge, UK: William B. Eerdmans Publishing Co., 2013)

Darrell Allen, *Beyond Pacifism: Determining the legacy of Uchimura Kanzô* (Saarbrücken: Scholar's Press, 2013)

赤江達也『「紙上の教会」と日本近代——無教会キリスト教の歴史社会学』岩波書店、2013年

Mira Sonntag, “A legacy in question: Uchimura Kanzô (1861-1930) and Christianity in modern Japan” (*Religious Studies Review*, Vol. 43 No. 2, June 2017, 125-135)



Thank you for your attention!

ご清聴ありがとうございます。

